

《追悼 伊藤章教授》



故 伊 藤 章 教授

## 伊 藤 章 学 兄 を 悼 む

三 好 豊 太 郎

(一)

伊藤章学兄とは、明星大学での研究室が隣りであった関係上、この10数年の間、何かにつけて、親しい御交わりをつづけていた。しかるに突如として学兄の訃に接することとなり、誠に感慨無量である。学兄は同僚に対しては常に懇切、丁重であり、学生に対しては厳格、細心な

注意を払い、しかも絶えず自らの研究に対して、きびしく追求をしておられた。ユーモアを交えての時々の実験室での雑談も、今はもう過去の思い出となり、数多くの会合での印象的な会話の断片が、そこはかとなく浮かんで来るこの頃である。中でも卒業生の結婚式に同席して、かわした座談は忘れがたいものがある。

学兄の生涯67年は現代ではまだ早きに失する

年輩である。まだ学兄が未来に託した、多くの夢を抱いていた研究業績のことを思うと若い世代の人々に対して、どうかこれを実らせていたきたいと思う心が切である。このような気持で、学兄の大学に残された2・3の論文をよすがとして、掲げることにした。併し専攻の違いなどの点もあり、真に哀情の一端を現わすことが出来たに過ぎない次第である。

## (二)

「未来社会について」(明星大学社会学科研究報告 第1集 5~14頁, 1969年3月刊)

この編においてはL・H・モルガンの「古代社会」からの引用をもって始めている。この書は社会学研究者にとっては、馴染の深いものであって、私も恩師の建部遯吾教授が古い頃の講義の時に、しばしば一段と声を高めて紹介された頃をなつかしく思い出す次第である。学兄はモルガンのこの書物について、次のように述べて居られる。「モルガンはこの研究のために殆んど40年の間、北アメリカのインディアンの血族団体であるイロクオイ種族の中で生活し、その豊富な生活体験を基礎として、同種族のいろいろな社会過程を分析したのである。そしてそれのみに止らず、彼の体験を論理的に拡大し、太古のギリシャ・ローマの文献、資料と対比し、それととりくんで、両者の社会形式が同じものであるという、すばらしい学術上の発見をしたのである。」と。そして、更に同稿に次の如く、同書の最後によって引用している。「もし進歩が過去の法則であったように、将来の法則でもあるならば、単に財産(富)を追求することは、人類が最後の運命ではない。……中略……政治における民主主義、社会における友愛、権利の平等、普通教育、これらこそ経験、理性および科学がそれに向って、絶えず努力しているところの次のより高い社会段階をさし示

すであろう。それは古代氏族の自由、平等および友愛を、もっと高い形態で復活させるものである。」

このような記述をした後、未来社会について、次のように述べている。「それはともかく未来社会において、文明の危機がおこっても、これを克服しなければならないのである。しかし、それを克服するためには、人間は今から、どうして克服するかを研究し、実行しなければならないのである。つまり未来社会が提出するであろう問題を今から考え、それに対処するようにしなければならないのである。」

このような問題意識をもって、着々として現実社会の調査研究を進めておられた。その労作の1・2をあげることにしよう。

## (三)

「都市化地域の農業水利を中心として」(明星大学社会学科研究報告 第4集 1972年3月刊)

学兄はわが国における土地利用の社会経済的研究の、極めて限られたものであったことに注目して「土地利用の研究目標、研究方法を樹立しなければならなかったが、先ず対象についていえば、水田では土地改良事業の経済効果を、畑については桑畑を中心とした土地利用の変更——桑園の減少を長期的(動態的)に、短期的(静態的)に規定したものは何か——を」研究することにした。

ここに新しい問題として、昭和35年度以降の日本経済の高度成長が、もたらした都市の巨大な膨張である巨大都市、及び巨帯都市の出現を見るに至った事情の研究に注目し、特に後者巨帯都市「Megalopolis」の出現は農業社会なり、農業水利の条件に多くの変化を与えるに至ったのである。農地転用によるかんがい面積の減少、したがって受益農家の水利費負担の増大、

兼業農家と非農家との関係による賦役の困難と宅地化のための配水秩序の崩壊、下水、工場廃水などの用水への流入による水質汚濁あるいは地盤沈下などの現象があらわれ、農村は大きな被害を受けるに至ったのである。」として居られる。このような見地から埼玉県葛西用水路土地改良区及び見沼用水土地改良区を中心として、その維持管理の実態を調査したのである。そして今後都市化の進展により、土地改良区の運営が困難になれば、土地改良区の再編成なり、維持管理の市町村への委任ということが、起ってくる可能性のあることを示唆している。

#### (四)

「畜産の地域間協業に関する研究——育成牧場を中心として」(明星大学研究紀要—人文学部—第8号 1972年12月刊)

これについては「県内および他県との間に乳牛の預託を契約している育成牧場について、その実態を明かにし、育成と搾乳の両部門の地域間協業等の成立条件と山村振興との関連を究明することとした。」という意図の下に研究を進めた。

このようにして長野県及び神奈川県における育成牧場の実態の調査をし、その結果を次のように要約した。「さてこの育成牧場で育成された乳牛は如何なる評価を受けているであろうか。前述した如く牧場建設当初は、栽培技術も、育成技術もまずく、事故牛も多く出て、農家の信頼を得ることが出来なかった。その後、技術の向上にともなって牧場に対する評価も高まり、受託頭数も増加したのである。黒姫牧場で育成された乳牛は、2産目位から泌乳量が農

家育成の乳牛より増加し、かつ耐用年数が長いという評価を受けているといわれる。また、発育成績については体長・体高は農家の育成よりもすぐれているが、体重では落ちるという。」

さらに経済的な面において、経営上の黒字を示している長野県根羽村の事情について、次のように述べている。「もちろん、当初の赤字を返済し、全部の減価償却をしているわけではないけれども、経営の黒字の原因は何処にあるのか」の原因の究明を試み、第1に仔牛は数戸の農家に、低額で預託したこと、第2は牧場長の経営技術のすぐれていること、第3に村当局の姿勢から来たことをあげている。そしてこれを最後に「神奈川県と長野県の間に見られる地域間協業の実態を見たのであるが、その将来は悲観的と言わざるを得ない」としている。

#### (五)

これを要するに理論と現実との関連は常に形而下的科学的の直面する課題であり、学徒はこれに如何に対処するかが要請されている。両者は共に推進されるべきであり、共に限りなき前進を期待されている。

学兄は常に真摯に事実を追求し、真実にそれを受けとめようとする態度を堅持されていたことが感じられる。そして研究心が深く、尚大いになすべき課題を抱きながら、にわかには他界されたことは、誠に惜しんで余りある次第である。

ここに謹しんで、深く学兄の御冥福を祈る次第である。

(1981年11月15日)

(みよし とよたろう、本学教授)

## 伊 藤 章 教 授 年 譜

本籍 福井県福井市東宝永町2-1-15

住所 東京都杉並区高円寺南5-18-18

- 大正3年3月10日 福井県福井市東宝永町にて出生。
- 大正9年4月 福井市立宝永尋常小学校入学。
- 大正15年3月 同校卒業。
- 大正15年4月 福井県立福井中学校入学。
- 昭和6年3月 同校卒業。
- 昭和6年4月 姫路高等学校文科乙類入学。
- 昭和9年3月 同校卒業。
- 昭和9年4月 東京帝国大学文学部社会学科入学。
- 昭和12年3月 同大学卒業（文学士）。
- 昭和12年4月 東京帝国大学農学部農業経済学科入学。
- 昭和15年3月 同大学卒業（農学士）。
- 昭和15年8月 国立北京大学農学院助教。
- 昭和17年2月 国立北京大学農学院副教授。
- 昭和20年12月 国立北京大学農学院副教授を退任。
- 昭和21年12月 農林省勤務（農地局，統計調査局，開拓研究所 等）。
- 昭和25年4月 農林省農業技術研究所（土地経済研究室長，土地利用研究室長 等）。
- 昭和29年4月 東京大学農学部講師（農村社会学担当，兼任）。
- 昭和36年 「日本農業機械化の分析」（共著）にて昭和35年度日経・経済図書文化賞を受賞。
- 昭和37年3月 東京大学より農学博士の学位を受ける。
- 昭和41年4月 農地整備計画委員会専門委員。
- 昭和42年5月 農林省農業技術研究所（土地経済研究室長）を退任。
- 昭和42年5月 明星大学人文学部教授（都市農村社会学，社会学，社会学演習 等担当）。
- 昭和43年6月 山村振興調査会評議員。
- 昭和44年4月 名古屋大学文学部講師（農村社会学担当，兼任，1年間）。
- 昭和46年1月 農業水利問題研究会委員。
- 昭和46年4月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻修士課程開設に伴い，同課程担当（農村社会学特講，社会学演習担当）。
- 昭和48年6月 科学技術庁技術士（地域農業開発計画）試験委員（1年間）。

昭和49年3月	東京大学農学部講師を停年規定により退任。
昭和49年4月	農林省農業者大学校講師（農村社会学，都市社会学担当，兼任）。
昭和50年4月	名古屋大学文学部講師（農村社会学担当，兼任，1年間）。
昭和50年4月	千葉大学園芸学部講師（農業経営担当，兼任，1年間）。
昭和51年4月	明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程開設に伴い，同課程担当（社会学理論特殊研究，社会学演習担当）。
昭和51年4月	松山商科大学講師（農村社会学担当，兼任）。
昭和55年3月	農林省農業者大学校講師を退任。
昭和55年9月	明星大学人文学部社会学科主任教授。
昭和56年9月26日	逝去，享年満67歳。
昭和56年9月	勲五等瑞宝章。

学会加入 日本社会学会  
 関東社会学会  
 日本農業経済学会  
 村落社会研究会  
 農業分析方法研究会

## 伊 藤 章 教 授 著 作 目 録 (抄)

著 書 ・ 論 文 名	発表年月	発表誌名・発行所等
『農村社会学講義案』	昭和18年3月	北京大学農学院
商品生産と土地利用	昭和27年2月	『農技研報告』H第3号
土地改良と土地利用	昭和27年6月	『農技研報告』H第5号
桑園の衰退と日本農業の変貌	昭和29年3月	『農技研報告』H第11号
『農業における長期投資の経済性』（共著）	昭和31年3月	農林省農地局
『農業水利の長期効果』（共著）	昭和31年3月	東大農学部農経教室
『土地利用より観た養蚕業に関する研究』（共著）	昭和32年9月	東大農学部農経教室
土地利用と養蚕業	昭和33年3月	農林省蚕糸局
土地改良の経済効果	昭和35年1月	『農業経済研究』第31卷第3号
土地利用と養蚕業	昭和35年4月	東畑精一先生還暦記念論文集 『経済発展と農業問題』所収
『日本農業機械化の分析』（共著）	昭和35年6月	岡田謙・神谷慶治編，創文社

An Analysis of Agricultural Mechanization in Japan	昭和36年 8月	第10回大太平洋学術会議(米) 発表
『農業近代化と農民意識』(共編)	昭和37年 9月	『日本の農業』第13集
農民の思想と実践	昭和38年 1月	『農基月報』第116号
『日本農業の方向と農場整備の問題』	昭和38年 3月	農林省関東農政局
Benefits of Land Improvement	昭和38年 5月	第5回国際かんがい排水会議(日) 発表
自立と協業	昭和39年 1月	鞍田純先生還暦記念論文集『農業の経営と農協』所収
農村社会の変貌と今後の展望	昭和39年 2月	『農業と経済』30巻第2号
習俗社会	昭和39年 3月	東畑精一・神谷慶治編『現代日本の農業と農民』所収
Decline of Sericulture and Related Shifts in Japanese Dryland Field Agriculture since 1930	昭和39年 5月	"Rural Economic Problems" vol. 11, No. 1.
Recent Changes in the Rural Communities in Japan and their Prospect	昭和39年 8月	第1回国際農村社会学者会議(仏) 論文発表
牛の育成牧場の経済性	昭和41年 8月	『農業構造改善』4巻第6号
農地基盤整備関係社会資本と水稻生産力	昭和42年 3月	『土地改良投資配分方法に関する研究』所収
『農場整備研究の意義と問題点』	昭和42年 8月	農林省農業技術研究所
『農山漁村集落改善調査報告』(共著)	昭和43年 6月	建設省住宅局
未来社会について	昭和44年 3月	『明星大学社会学科研究報告』第1集
現代社会と今後の課題	昭和44年10月	『めいせい』vol. 3, No. 7.
レクリエーションと山村振興	昭和45年 3月	『山村の資源開発』所収
畜産の地域間協業と山村振興	昭和46年 3月	『山村の資源開発Ⅱ』所収
農業水利合理化に関する研究	昭和46年 3月	『農業水利合理化に関する調査研究報告』所収
『農業水利合理化事業の経済効果』(共著)	昭和46年 3月	埼玉県農業水利課
愛知県における粗飼料流通の成立条件の実態調査	昭和46年 3月	『大規模酪農経営における育成および粗飼料生産の分化に関する調査報告』所収
草地改良における入会権の権利調整	昭和46年 5月	『明星大学研究紀要一人文学部』第6号
愛知県における販売を目的とする集団粗飼料の栽培の実態と問題点	昭和47年 3月	『大規模酪農経営における育成および粗飼料生産の分化に関する調査報告(最終報告)』所収
畜産の地域間協業に関する研究	昭和47年12月	『明星大学研究紀要一人文学部』第8号

山村社会における高齢者問題	昭和48年3月	『山村の就業構造』所収
山村の水資源管理(1)	昭和48年3月	『山村の資源管理Ⅰ』所収
普通畑の土地利用変動分析(1)	昭和48年3月	『土地利用変動分析調査報告書』 所収
首都50km圏農用地保全の実態	昭和48年3月	『農用地の維持保全の実態』所収
山村の水資源管理(2)	昭和49年3月	『山村の資源管理Ⅱ』所収
『農村における土地利用のあり方に関する調査』(共編著)	昭和49年5月	農林大臣官房企画室
自然環境保全と山村資源の維持管理	昭和50年3月	『山村振興と自然環境保全』所収
水資源の維持管理と自然環境保全	昭和51年3月	加藤譲編『現代日本農業の新展開』所収
観光開発と自然環境保全	昭和51年3月	『山村振興と自然環境保全Ⅱ』所収
大規模宅地開発と農村社会	昭和51年8月	『大規模宅地開発にともなう農業との調整に関する調査Ⅰ』所収
『農村社会学』	昭和52年9月	めいせい出版
『峡谷型山村の産業振興と文教・生活環境整備』(共著)	昭和53年3月	全国農業構造改善協会
人と水と土地	昭和53年3月	阿閉吉男教授退官記念論文集『近代社会学の諸相』(共編)所収
都市と農村の一体化	昭和53年5月	『農林図書資料月報』29巻第5号
『社会学』	昭和53年5月	めいせい出版
都市と農村の一体化過程	昭和53年8月	『大規模宅地開発にともなう農業との調整に関する調査Ⅱ』所収
大都市の農業	昭和55年3月	『めいせい』vol. 13, No. 12.
農村と都市の一体化過程	昭和55年3月	『明星大学社会学科研究報告』第12集
大都市のなかの農業と農村	昭和55年9月	『公害の現状と回復——宅地開発と農業』所収

注：著書・論文名中『 』を付したものは単行本を表わす。

この他にも多くの論文・調査報告を執筆されているが、ここでは主要なものに限った。